

お年取り



入来町史の下巻年中行事の項に、お正月の挨拶としては「若コオナイヤシツロ」と言つとある。多分薩摩の何処へ行つても似た挨拶があるのだろうと思う。町史にはこの言葉は「若くおなりあそばしたでしょう」というゆかしくもめでたい挨拶なのだと言われている。

一月も半ば過ぎのある日、私は夫に、私の故郷では、大晦日の「お年取り」の他に小正月の「お年取り」、節分の「お年取り」と三回もやっていたという話をしていた。夫は、「ここでは年取りの挨拶が『若コオナイヤシツロ』で、年が取られるからだ」と言う。私はハタと「ああこの挨拶は、年を取るの取るを『取つて少なくともす

る』という意味に置き換えた薩摩の人のユーモアから来たのだ」と初めて納得したことだった。

鹿児島の人たちには薩摩狂句や新聞の「黒じよか」にみられるように、ユーモアを生み出すオがあると思う。これは生真面目くそ真面目、理屈屋の諏訪人には全く無いもので、明るい南国風土が育んだものなのだろう。

今の若い人たちには「お年取り」と言つてもその意味が分からないことだろう。年齢を欧米なみに満年齢としたのは戦後すぐではなかったと思うが、それまでの数え年を使わなくなつて久しいから、もう意味のない「お年取り」などという言葉は死語になつて当たり前だと思つと。ともかく戦前は、年齢のカウントアップは誕生日に関係なく、「お年取り」の済んだ一月元旦と決まっていたのだ。信州で三回の「お年取り」があつたといつても三才増えるわけではないから、「年取り」という表現は子供心にも変だなあ

と思つたものだった。

私の子供時代は、世界大戦に向かつて進んでいた暗い時代だった。しかしお正月は、生活のけじめとして大切に行なわれ、待ち遠しい楽しみであつた。

わが故郷の信州諏訪の大晦日の「お年取り」は、全ての掃除を終えて、神棚にお神酒、お洗米、小さな重ね餅を供えて家族全員がお参りをして、その後炬燵を囲んでご馳走を頂くのである。信州では普段は口に出来ないブリの塩焼きに始まつて、大根、サトイモ、人参、コンニャク、チクワ、椎茸、昆布などをゆっくり煮込んだ「のっぺい汁」、茶碗蒸しに野沢菜の新漬け、そのほかお正月用に出来たばかりの品々など、炬燵の上の『もろぶた』と呼ばれていた大きな漆塗りのお盆の上に所狭しと並べられる。一杯で顔を染めた下戸の祖父を中心に、除夜の鐘が聞こえてくるまで食事を楽しんで談笑しながら過ごす。そしてその夜は枕元に、恵比寿講で

買つてもらつた新しい足袋や下着、新しく母が編んでくれたセーターなどを並べて眠るのだった。

元旦は、これはまた楽しみのお雑煮であるが、それも早々によそ行きを着物を着せてもらつて、追羽根と羽子板を手に外に出る。そうだ、その前にお年玉を祖父から貰うという楽しみもあつた。

そつした正月の思い出に父が居ないのは、太平洋戦争直前から中国に出征していたからで、その二年後には祖父も祖母のあとを追つて亡くなり、そのまた二年後には終戦を迎えて、のどかなお正月も終止符が打たれたのだった。

それでも終戦から二、三年後までは、乏しい中を小正月の繭玉を柳の枝に付けることなどやっていたと思う。それが途絶えたのは、その後の経済の成長とともに、物質は増えても時間がない忙しい社会に変貌してしまつたからだと思う。

終戦の頃は一日が長かった。夫に先立って一人東京から鹿児島に越して来た頃も長いと思っ
た。それが町起こしにと花水木会を結成して少
し動いただけで全く多忙の日々となった。あと
何年活動できるか心もとないが、この正月を、冥
土の旅の「一里塚」でなく、年を取り払ってもら
って「若コウオナイヤツ」たことと前向きに信
じることにしよう。

